

今日の説教のポイント <創世記3章1-13節>

①女が禁断の実を採って食べた時から人間は罪の存在となったのか？
ではその前、蛇に誘惑された時点ではまだ無垢な存在だったのか？

よく知られているアダムとエバが蛇に騙される話です。普通、これは人間の墮罪の始まりを語っている話だと思われがちです。すなわち、女が蛇に騙されて神様から「食べてはならない」と言われていた実を採って食べた時から、人間は罪を犯すようになったのだと。しかし果たしてそうでしょうか？ 女は蛇と会話しながら次第に誘惑されて行きます。その間の女の言動を見ますと、蛇だけではなく女にも多くの問題があることが分かって来ます（3章2～3節と2章16～17節の比較）。一体、いつから人間は罪に堕ちたのか？ この問いは正しくありません。創世記第三章は人間の罪の起源の時期を問題にしているのではないからです。では何を問題にしているのでしょうか？

②人間は、神様の命令を守り、破ることもできる存在として造られた。その中であえて守る道を行く時、神様は一番喜び給う。

これまで創世記を読んで来て、神様が人間に与えられた自由や権能の大きさを思わずにはおれません。神様は私たちを言った通りに動くロボットのように造られたものではありません。神様の言われたことを信頼して聞き従うこともできるし、また聞かずに背くこともできる自由を持ったものとしてお造りになりました。人間が自由の中で自ら選び取って、神様をどこまでも信頼して聞き従って歩んでくれることを願っておられたのです。しかし、人間はその期待を破り、神様の命じ給うたことを破りました。神様は人間に自由を与え過ぎられたのでしょうか？ そうではありません。神様はあくまで罪を犯した人間自身が、神様の御言葉に聞き従って生きることが一番平安であり、幸いであることに気づいて立ち帰ることを待って下さっているのです。

③聖書に記された、こことは正反対の内容を思い巡らそう。

イエス・キリストは、荒野でサタンに誘惑を受けられたとき、アダムとエバとは違い、徹底して神様の言葉（聖書）に立ち続けてサタンを退散させられました（マタイ4:1～11）。パウロは、蛇ではなく、神様の救いの出来事を告げてくれる者がいること、それに聞くことができることの素晴らしさを語っています（ローマ10:14～15）。アダムとエバは蛇の言うことを聞いて、確かに死なず、目が開き、知識は増えました。しかし、不安と恐れと恥の中に置かれて生きることになったのです。私たちは神様の声に聞き従って歩み行く道を選ぶようではありませんか！